

令和4年度第2回山形県産業構造審議会・会議録（要約）

日時：令和5年3月7日（火）14:00～16:00

場所：山形県庁2階 講堂

1 開 会

2 会長あいさつ

3 審 議

・令和5年度における産業振興施策の展開について

【長谷川会長】

本県経済は、緩やかな持ち直しをしている状況にありますが、新型コロナウイルス感染症法上の位置付けが見直されることとなり、社会経済活動の正常化に向けて、大きな転換期を迎えております。また、人口減少の加速、不安定な国際情勢、資源価格の高騰や円安等による物価上昇など、多くの課題に直面する一方、デジタル化や脱炭素社会の実現に向けた取組みが進展するなど、大きく変化しております。

こうした中、本県産業経済の発展に向けて、いかに競争力のある、付加価値の高い製品やサービスを生み出していくか、そして、いかに県内産業を支える人材を育成、確保していくかが重要であります。

そのような状況を踏まえ、令和5年度、県では「未来の「やまがた」をつくる人材育成・確保を推進」、「持続可能な成長に向けた産業の生産性向上・高付加価値化」などに取り組んでいくこととしているようです。

本日委員の皆様からは、令和5年度における産業振興施策の効果的な展開方法や様々な課題について、広範で活発なご意見をいただき、議論を進めていきたいと考えておりますので、どうぞ宜しくご協力の程お願い申し上げます。

以下、各委員から発言のあった意見

【浅野委員】

私は日々、大学生を始め、高校生のキャリア支援に関わっております。また、企業内カウンセラーとしても、職場定着のための社員教育や面談、採用のお手伝いをしております。そのような両者の思いをつなぐ役目と認識し、私は「未来の「やまがた」をつくる人材育成・確保」についてお話をさせていただきます。

女性や若者、Uターン者への施策が検討されているということで、とてもいいことだなと思うのですが、そこに至るまでの過程にもっと力を入れていただきたいと願っております。そのためのアイデアを二つ述べさせていただきます。

一つ目です。現在、中学校・高校で行われている探究学習支援の人材コーディネーターの配置を願っております。全生徒が関わる探究の時間に、一つ目、山形の仕事を知る。二つ目、山形で自分が働くイメージを持つ。三つ目、山形で活躍し自分を活かせるイメージを持つことができる。これら

三つを人生の転機の際に県内就職やUターン就職を前向きに捉えて、検討する材料として知っておいて欲しいのです。

またこの学習は、若者と大人が関わる絶好の機会です。この交流を通し、若者には山形で生きていくことに希望を持てる場、人や仕事を知る、また自分を活かせる場、可能性を知る機会と捉え、そして大人には若者の豊かな発想を実感できる貴重な機会と捉えていただきたいと思います。

こういったいい機会である探究学習ですが、私がコーディネーターとして関わっている中で、ある問題を強く感じています。それは、若者の探究テーマの専門アドバイザーにつなぐ人材がおらず、若者が真剣に取り組んでいる地域課題、また製造分野等において、こんな物があつたらいいなというアイデアに対して、向き合う大人に出会えずにプロジェクトを終了してしまうということです。個別に支援しているグループがあるのですが、つなぐにもやはり限界があります。

やまがたA I部や山形東高のように人材育成の協定が結ばれ、サポーターに恵まれた環境があればいいのですが、多くの学校では、教育機関の中で若者が調べ学習とアンケートを中心に探究活動をしているのが実態です。この課題に対し、もっと地域の大人や企業が関わり、企業と若者をつなぐ組織や仕組みができて欲しいと思います。

先週末、Y T S山形テレビが主催で、SDG s 未来甲子園が開催されました。新庄北高の高校生が地域課題、高齢者問題について、地域の大人と関わり見出した解決策が評価されておりました。また、毎年コーディネートさせていただいている山形北高の探究学習発表会では、各分野の社会人ゲストが楽しみにアドバイザーとして来てくださっています。そしてこの探究学習の関わりをきっかけに、その分野へ進学を決める生徒が数多くおります。これだけ大きな影響を与える機会です。

これらのように両者の関わりを通して、お互いにWinWinの関係になるのではないのでしょうか。これこそ産学官連携によるコンソーシアムや人材コーディネーターの配置で取り組めたらと願っております。

二つ目は、中学生・高校生の探究学習の支援、伴走に関わる情報サイトの設置です。人材コーディネーターは、数多くある中学校・高校をなかなか支援しきれないという現状にあると思います。なので、人との関わりだけでなく、最近の若者はSNSを用いた情報収集がとても得意ですので、探究学習に特化したサイトがあってもいいのではないかなと思います。企業が若者応援のフラグを立て、応援できる分野や提供できるコト・モノ・ヒトを掲載し、高校生がそれを見て自分で問合せができる状態が理想です。

今年度は小学生向けの郷土愛を育てる県のサイト、ふるさと山形発見ナビが開設されたと拝見しました。大学生向けには、県内閲覧目標を大きく上回っている山形県就職情報サイトがあります。その中間に位置し、山形の企業を知り、またどんなことをしているのかを知ることができる中学生・高校生への探究学習への支援、伴走に関わる情報サイトがあればいいかと願っております。

今日の午前中、大学で、山形出身の学生が「山形に仕事がない」と言っておりました。こうやって県外へ飛び立とうとする若者が多くいるという事を常々感じております。更に多い理由は「一度は山形を出てみたい」という言葉です。私も一度山形を出た身ですが、外で得てきたものを今山形に戻ってきて活かしたいと思って、活かしているかどうかわかりませんが、学生にも「戻ってきてね」と必ず言っております。

これら「出てみたい」という思いを否定するのではなく、「山形でもできるんだ」「山形でもこういったことをやってる人がいたんだ」と思える体験を、中学生・高校生が必ず関わる探究学習の時期に、必ず通る道・学ぶ県の情報サイトを使って、知る機会を持つということが大事ではないかと思

います。県外へ出た人が「もうそろそろ山形に戻ってもいいかな」と思った時に、仕事がないという間違った認識で戻る機会を失うのではなく、中学生・高校生の探究学習で使用した情報サイトを思い出し、覗きに行くというアクションにつながるような仕組み・仕掛け作りに期待したい。山形のキャリアに興味を持つというところに持っていきたいのです。

山形で生きる可能性が出てきた時に、県の信頼のあるサイトから情報を得ながら、それらをヒントに前向きに捉え、キャリアを選ぶきっかけになって欲しいです。そこでやっと全国初の試みであるという再就職支援のインターンシップへの参加動機につながるのではないのでしょうか。以上です。

【安部委員】

私は、観光業に従事しておりますので、その立場から三つほど意見を述べさせていただきます。

一つ目は、ウィズコロナのここ数年、苦しい中でも県の支援が本当に有難かったと思います。

現在、コロナの収束の状況は見えて来ておりますが、山形は温泉県といえども、やはり温泉を加熱しなければならない施設があったり、光熱費、建築資材など色々なものがお客様の目にしないところで大幅なコスト増になっておりまして、一つ一つの企業の努力ではカバーしきれないような状況になっております。外貨獲得のための観光業の役割は小さくないと思っておりますので、継続的な支援をお願いします。

二つ目は、今外貨獲得という話をしましたけれども、国も県もインバウンドへの投資というものが重点項目となっており、例えば資料3の観光文化スポーツ部の予算案にもありますが、インバウンド戦略の推進、No.16になりますでしょうか。インバウンド誘客促進のための県内空港へのチャーター便の誘致及び県外空港から入国し、県内を周遊・宿泊する旅行商品の造成支援という項目があります。例えば、この県外空港というのが仙台空港だった場合、4月から、県内最大の受入外国の地域である台湾は、週17便というような状況まで回復して参ります。この数字は、単に東北山形に来てくださいということだけでなく、私達も台湾に行って初めて成り立つ数字だと思っております。

ですので、観光も一過性に訪れる人の数字を求めるだけではなくて、県外の地域ですとか、テーマやニーズに合わせて、例えば農業、食文化、芸術といったテーマで、異国間の交流みたいなものを促して、相手に山形との地縁を作ってもらおうというような新たな人口減少社会、インバウンド観光への対応というところで、観光も新しいフェーズに入ってきているのではないかなと感じます。

ですので、そういった観光というのが、一回とにかく来てくださいということではない、そういった人とのつながりの創出というようなことも、今後観光の役目になってきているのではないかなと感じておりますので、例えばそのような交流のところに補助していただくとか、少し時間はかかるかもしれませんが、チャーターに対して投入をし続けるというよりは、最終的にそれと同じくらい、それ以上に経済効果を感じることができるようになるのではないかなと思っております。

三つ目は、このインバウンドの投資というのがコロナ中、コロナ後の重点項目になっている中で、今まで以上に地域間での差ですとか勝ち負けというのが出来てくるなと感じております。

委員長の長谷川様からも高付加価値というキーワードが挙げられましたけれども、民間の施設一つ一つが考えていくというのはもちろんなんですが、県全体として山形のオリジナリティですとか、体験デザインというものを高みに上げていく必要があると思います。

こちらの予算案を見て、私なりにキーワードはどういうものかと考えた時に、山形の特異性という特徴は、信頼性であったり、自然・文化、そういったところに集約されるんだと思います。

ですので、今もちろん色々な戦略で観光的なプロモーションが作られてはいるんですが、例えば、

山形には最上川という川がありますので、源流から日本海までを歩く最上川トレイルとか、そういったもう少し大きなテーマで、県として魅力を、資源をつないでいながら発信していく。それは観光文化スポーツ部だけには留まらずに、もう少し産業界一体となった大胆な発想があってもいいのではないかなと思います。

やはりインバウンド経済の効果をこれからどのように取り込んでいけるのかというのは、もはや地域とか一県の問題ではないので、全体的にどういった外貨を獲得していくかという点で、そういったデザインというものも今後必要になってくるのではないかなと思いました。

【黒田委員】

工学系の人材が県に残るということは、県では非常に大事なことでと昔から言われていて、皆さん認識しているけどもなかなか実現できていない。もう何十年も経っているということです。

まず事態を打開するために何をすべきかということで、県の総合支庁の方々や米沢市の方々とも頻繁に作戦会議をしています。

その中で出てきている方向性として、一つ目は、若者が山形県を好きになるということがまず大事だと。そのためには、大学のキャンパスの中だけで生活しているのではなく、地域の活動をたくさんしてもらう。サークルとかボランティア活動とか、そういった機会を積極的に大人達が作っていきましょうという話をしています。

私も長年学生達と接していると、自分のアパートと大学のキャンパスだけを往復してきた人というのは、山形にいい印象を持たずに出て行きます。こんなところに居れないみたいなことを言う人もいます。

一方、お祭りに参加したり、ボランティアとして手伝ったり、地域での達成感を持った人というのは、温度差はありますけども、少しはもしかしたらやっていけるかもしれないと思います。それは人とのつながりで思うわけです。それで山形を好きになるというのが第一の条件です。

二つ目は、魅力的な仕事があるかということです。工学部、米沢キャンパスでは6割近い人が大学院に進学するので、認識としては高度な技術や知識を身に付けた人材だと自覚しているわけです。それを活かせる仕事というのをまず探す。活かせる仕事とは何かと言いますと、先ほど高付加価値化ということが出てきましたけど、仕様書に従って作るだけじゃなくて、そこに付加価値を付けて新しい物を作っていくということにチャレンジしたいと思うわけです。そういう仕事があるかということです。

地元の企業の方々にも色々な会合でお願いしているのは、ただ単なる企業紹介、我が社はこうですよという説明だけでなく、どんな仕事があるとか、それを作ることによって世の中はどのように変わるのか、一緒にやりましょうというエンジニアの方々からの声掛け、現場の人から出て来ていただいて、一緒にやりましょうと声を出していただくということで、仕事の中身に訴えていかなければならないと思っています。

特に今の世代の学生というのは、昔は華やかというか今考えれば無駄なことも魅力的に感じましたが、今はそれよりもSDGsなどにも関連して、何に役立つのかということに敏感です。そういったことで仕事の魅力をまずアピールしていただいて、県内にある仕事と学生をつないでいく場を大学と皆さんとで作っていきたいと思います。

三つ目は、待遇です。山形の地域好きになりました、こんな仕事魅力的だなと、この二つ目までは行くと思います。しかし待遇とか10年後の自分の収入の見込みとかそういったことが出てくると、

途端にトーンダウンしてくるということがあります。それで止むを得ず、好きだけど山形を去っていくという人はたくさんいます。なので、政策として、県内に人材を留めるということの1番は待遇です。

例えば、国で、博士の学位をとった人を採用すると税金が優遇されるというのがあります。山形県で例えば大学院生を採用すると、企業の税金が優遇される。県の働きかけや国の働きかけは色々あると思いますが、そういう大きな政策がないと人材はもう留められないかなと思います。職業選択の自由がありますから、ここいいですよ、どうですかと言っても最終的に決めるのは本人なので、本人が何で決めるかということやはりこの待遇です。

もう一つ将来的な話題ですけれども、今国で大きな3,000億円という予算が基金化されるということで、成長分野を牽引する大学等の機能強化に向けた基金というのがあります。

これまでの大学というのは、特に東京周辺にかたまっている私学文系の多くの人達は特に職業的スキルなく卒業しているわけですが、その一部分をDXとかデータサイエンスとか情報科学を扱える人達に変えられませんかという国からの提案です。手を挙げた大学には補助金がついて改革が始まるというわけです。

一方、国立大学には何が求められているかというと、大学院卒レベルの高度な情報エンジニアです。DXとかデータサイエンスとか情報のエンジニアを大量に養成してくださいというのが、国立大学に求められている国や産業界からの要請です。

今から数年後には情報系を専攻する大学院生や学生が、全国で倍増して出てくる。その人達を別に県内出身でなくてもいいですが、いかに山形県で確保できるかということが問題です。先ほどから何回も出てくるDX、これを県で浸透させていって、そのレベルを上げて付加価値の高いものを作っていくというところにつなげていくしかありません。企業でそういう人達を確保していくには、そこに待遇が関わってくるので、今からやっておかないと間に合わないです。

数年後には、大量に倍掛けした位に情報やデータサイエンスを専攻しますという大学院生・学生が現れますので、それを県でいかに確保するか。この政策を今から立てておかないと後れを取ることになりますので、その辺りが大事な事かなと思っております。

【清野委員】

今日ここに来る前までは、GX、我々パナソニックの商売でいくと、グリーントランスフォーメーションで投資を促進するような、そういった政策を立てて欲しいということをお話しするつもりでいたんですが、その前に午前中に一つ講演を聞いてですね、がらっと今日話す内容を変えようと思って参りました。

1点目は、先ほども話が出たやまがたAI部運営コンソーシアムの会長の松本さんの明るい山形MVP賞をとったときの話をします。それで思ったのは、これからは知の序列の逆転が起きますよというお話だったんです。今まで我々上席者、もしくは経験者が経験をしていない若手の社員に教える、指導するという流れだったんですが、先ほどもお話あったように、これからDXやAIを活用してビジネスを組み立てていく時代になれば、これは逆にその人達から教えてもらうという立場に変えていかなければ、企業としての競争力は増しませんというようなお話を聞いて、非常にこう焦りというか、問題提起をされたなと打ちのめされて帰ってきたところです。

2点目は、ファザーリング・ジャパンというNPO法人の理事の川島さんという方のお話を今日午前中お聞きしてきて、イクボスということでのお話だったので、育児をしている社員への支援と

いう認識でいたんですが、内容がほぼ部下をどう育成していくのか、社員にどう遇していくのかというお話でした。

仕事に社員から合わせてもらうのではなくて、社員の事情に仕事をどう合わせて変えていくのかということが求められているという視点は、私にとっては刺激的な内容でありました。特にうちの会社の規模からいっても、将来、これから社員がなかなか来ないということを想定したときに、10%社員が減っても今の業績を維持するためには、人がやらなくてもいい仕事の断捨離とそれをDXで置き換えること、あとは勘と経験で去年エアコンをこのぐらい卸したから、今年はちょっと力入れて102%で行こうということではなくて、気温が何月何日何℃っていうものが何週間、もしくは何日間続いたら出荷率はこう上がる、こう下がるというようなデータをしっかり持つておかないといけない。そのためのデータの蓄積、活用の方法といったものを学んでいくということが、これから我々卸しとか、そういった業界には必要だなと聞いていました。

併せて、カラフル組織ということで、我々の組織もどちらかというとモノクロの男性中心の会社でありますので、非常に古い価値観、上意下達というような文化が多かったんですが、これからはそうじゃなくて、知の逆流と一緒にすけども、色んな制約を持っている、プライベート的に介護もある、子育てもある、その他の自分のやりたいことも当然たくさんある。今までは無制約だと社員のことを思っていて、そういった制約のある社員を補欠に廻していたという考え方から、制約社員をどうやって主力選手にしていくかということが大事だということだったんで、ここは県の方から色んな事例を発信していただいて、それを学びたいなという気持ちがありましたので、お話ししたいと思っていました。

やはり会社を構成する社員の人モチベーションを高く持っていないと、当然どんなに技術がある商品を取り扱ったとしても、持続性がないなということを感じたところであります。

先ほど言ったようにDXの活用も含めて、山形の産業界といったものを、規模ではなくて質でどうやって日本一、東京に負けない、もしくはUターンやIターン、一度出てもう1回戻ってくるといことにするのかというと、やはりDXやAIを使った最先端の仕事が、東京の大企業と違って自分が中心になってやれる。それで、全国並みの処遇を貰えるということを実現していくような政策作りが必要だということと、モノクロのオールドボーイコミュニティのような組織から、男性、女性、また性別に対して色々な思いを持っている方、外国人の方を入れたカラフルな組織が産業構造の主流の県にしていくための政策というのはどうあるべきかということを議論していくことで、人を呼び込むような産業界としての動きを作る必要があると思います。

最後に、昔は若い人は不満があって辞めました。つまり長時間労働だとか。今は不安ということで、将来この会社にいても自分ははたして社会でやっていける人間に育つんだろうかという不安が、大きい理由として挙げられていることに気付かなければならないということだったので、そういった意味で、先ほど黒田先生のお話の通り、DXやAIという先端の技術で山形の産業界の会社としての技術力を上げて、内部はそういったカラフル組織で全員が輝けるような、欲張った人生を生きられるような、そういった組織に変えていくという両面の変更が必要だなということをお伝えしたいと思います。

【長委員】

ここ数年でQR決済がかなり進んだと体感しております。1万円を超えると皆さん、QR決済とかカード決済をされているようなんですけども、QR決済の手数料が無料だった時は集客のためど

んどんQR決済を促進していたのですが、QR決済の手数料無料キャンペーンが終わってから、それを止めるという仲間のお店が結構増えてきました。

やはりキャッシュレス決済の手数料は、私達のような零細の商店には結構大きな負担だったりするので、キャッシュレス化と世の中騒いでおりますが、私たち商店街、小さなお店には逆風でしかないと思われます。

魅力ある商店街ということで、施策を打っていただくようなんですが、魅力的な商店街のイメージは、女性が大好きなショッピングを楽しんだり、カフェ巡りをしたり、そこに行かないと出会えない商品や人との会話がそろってこそ街の魅力、山形県の魅力につながると思います。魅力的な商店街として予算をいただいてますが、その枠を超えて若者のリーダーシップ育成の予算など、若者創業支援が商店街の予算となお一層連動していただけるようお願いいたします。

若者の支援に加えて、企業の中堅、ベテラン社員の学びなおしや創業しやすい環境が整うことも大切です。今回山形県庁で、新しい施策でリスクリングというのがありましたが、もし、県庁職員の学ぶ枠に隙間があるのでしたら、一般の方でもやる気のある方を是非参加できるようにして、学ぶ機会を増やしていただければなと思いました。

それから、私立・公立高校のお話なんですが、今日、今、まさに公立高校の受験が行われています。公立の倍率が悪い、人気がないというところで、弊社の従業員で子供が今度中学校3年生になるお母さんに聞いてみましたところ、「勉強しなくても行ける高校があるから大丈夫、だから勉強しない、困る」と申しておりました。共感する方は少なくないのではないのでしょうか。

公立高校と私立高校、高校間の競争が適度に行われて、「こういう理由でこの高校に行きたい」ということをしっかり発信できるような魅力のある高校を作ることによって、小学生・中学生が学力を向上させ、学力の向上を図っていただければなと思います。県の子供達の学力が上がるということは、将来的に県外から移住、定着したいなという家族がいた場合、山形県の教育レベルが高いから安心だなと思って、すごく山形県に住みたいなと考えるときのポイントになると思います。

それから、山形県の南の方に住んでいる者として、今回新幹線の予算がついてきているというのはとても嬉しいことです。一方でツーリズム、観光のキーワードが「サクランボ」にフォーカスしてしまうと、努力をしても知名度が低い地域では置いて行かれているような気がしました。

やはり県南地域は、ワインとか日本酒とかそういう物が有名ですので、もちろん「サクランボ」にフォーカスしつつ、そのことも忘れないでいただきたいなと思います。

そして、交通というところで、やはり新潟県（もちろん福島側へも）との交通をもう少し整理していただけたらなと思いました。昨年大雨で道が止まりましたけれども、あの国道113号は東日本大震災の時に支援物資を運ぶのに役に立っていたと記憶しています。米坂線も復帰させるんだらうかと、とても不安になっています。そこも実は観光列車として使えば全然収益を取れるんじゃないかと、個人的に高畠町の主婦の皆さんからは意見をいただいております。

今週、特許について調べてみました。山形大学の特許ってどうなっているのかなと思って見てみたら、ちょっと面白い動画に辿り着いて、3Dの歯車の動画でバズっているんですね。その動画がものすごく面白い。アニメーション化されていて、使い方はわからないけど、どうやって使うのかなと想像が膨らむような素人でも面白い動画がインターネットで視聴できます。そこから山形大学の特許ってどうなんだろうと興味が湧き、調べると沢山先進的なことをやっているのに驚きました。私を含め山形県民は、地元でありながら山形大学の魅力について、まだまだ知らない事が多いのではないのでしょうか。

山形大学の魅力の認知度を高めるためだけではなくて、もし山形大学がたくさん特許を取って、その特許を取る時のサポートが山形県の企業であったならば、山形県の産業の発展につながるし、学生が山形大学って魅力的だなと思って、山形大学に進学する理由の一つにもなり得ます。また、山形の産業の人達と触れ合う機会も増えて定着する。そんな未来があるのではないかと期待してまいります。山形大学の特許の申請のサポートと一般市民への見せ方等をもっともっと強化していただければという事で、私の意見を終わらせていただきます。

【中西委員】

私からは、大きくは企業としてというところと、あと山形の魅力という観点から話ができればと思います。

まず前回もそうだったんですけども、今回も5年度の予算案を見て、かなり幅広く課題を拾っていただいているなというのと、前回の去年に比べてかなり分かり易く課題ごとというかメニューごとの形になって、新規で計画されているものもたくさんあって、スピード感持って様々変わっているなと思いました。

この中で今様々お話ありましたが、うちの会社の方からという意味では、一企業としてはやはり人材がとにかく足りない。設備がどうの技術がどうのというのも、とにかく人材がいないと他の企業との競争にも勝てないですし、私達も成長していけない。という中で、人材としては、外から人材をまずは獲得する、そういったところの課題とうちの社内にいる人材、あとは地元にいる近くの人材をどうやって活かしていくか、成長していくかというのは、本当にうちの会社としては何よりも課題として今捉えています。

そんな中でもたまたま県として、それこそリスクキリングの対応ということもされているので、先ほど長さんからもあったんですけども、例えば県庁の職員向けにされているところをオープンでできる範囲内で、民間企業にも枠をご案内いただけたら嬉しいなと思いました。せっかくセミナーとか開かれていて、もちろんキャパの問題とかあると思うんですけども、私達のような民間のところにもご案内いただければ、マッチするところで社内で検討することもできるかなと思っています。

それこそ人材育成ということで、ちょうどやまがたA I 部の話がありましたが、尾花沢だとそれに参加している北村山高校というのが近くにありまして、かなり人口減少のあおりをくらってですね、私達の世代の時は10何クラスあったんですけど、今年もう遂に1クラス位になりそうということで、私共も人口減少に関してはすごく危機感を抱いている。

やまがたA I 部について、なかなか協賛するメンバーも少なく、やまがたA I 部の方からとか、尾花沢市からも支援にも限界があるということで、尾花沢の企業でどうにか支援できないでしょうかという話をいただいて、私ども含めて3社が少しずつ支援をして、北村山高校のA I 部に希望するメンバーを入れていただいたというようなことが昨年ありました。

それを持って、何か形というか実績に残ればいいなとは思っているんですけども、そもそも北村山高校の募集人員に対しての応募が少ないとか、そういったところの現状と言うのはまた別な話として、高校生にそういう最先端の技術に触れる機会を持つというのは非常に大切なことだなと思いますし、山形で色々な企業とかがバックアップしてやるっていうのも、そうやって旗揚げしてくれるところにしっかり賛同できるというのは非常に大切だなと思っております。

同じように尾花沢市の方が旗振りをして、徳良湖というのが近くにあって、ワーケーションの体験企画みたいなものをされているようなんですけども、そういった形で小さな事かもしれないです

けど、色々そういう企画の中で接触する機会があれば、他県からの人材、有能な人材がこちらの方で接触する機会が増えると。そういったところが増えると、急にとはいかなくてもそうやって少しずつ好きになるというか、接触の機会が増えるというのは素晴らしいことだなと思います。

何かそういうところに私達も地元の企業のみならず、地元民がそういったところをしっかりと一生懸命、一緒にやっていけるとなおいいなと思ってますが、どういう形で関われるのか、どういう形で何かご協力できるのか、魅力を伝えられるかというのは今後の課題かなと思います。

あと先ほどの人材のところで言うと、黒田委員の方から情報網に強い学生さんが世の中に溢れるということで、私どもとしては非常に期待したいと思って聞いておりました。それをしっかりと県に残ってもらうために、学生の時から山形県をいいように思ってもらうとか、そういったところは非常に大切だなと思っています。

私自身が山形出身なんですけれども、今は実は神奈川県の川崎に自宅があります。家族の都合もありまして、私だけが毎週単身赴任のような形で山形の方で仕事をして、週末は川崎に戻る。職業柄、山形の自宅だけでなく、色々な所も出張で出歩きますし、海外に行ったりとかもあるので、社員にも協力してもらって今のような形でやっているんですけども、個人的なところで言うと、高校卒業した時にやはり山形のことを知らなかったです。今年 45 歳になるんですが、私の世代だとテレビと紙媒体くらいしか情報を得る機会がなかったんです。

もちろんそういったところも今とは実情が違うので、今の若者は色々な媒体から、携帯からとかインターネットもたくさん使いますし、色々な所から情報を得ることができるので、いわゆる SNS とか、そういったところもしっかり活用して、若者向けの PR、アピールというのが必要かと。

どちらかというと本当に山形はその辺が得意ではないなと感じています。商売っ気がないと言ったらおかしいですけど、どんどん来てという感じになかなかならないのと、たぶん地元の方々は自分達ではいいと思っているんですけど、それをアピールするほどではないと思っている。そういう節があるんじゃないかなと私は感じていて、その辺はどんどん山形の未来のためにも、山形のそういういいところとかお洒落なところをアピールしていく必要があるなと思っているので、今回の施策、こんなにたくさん色々やられているので、いいことをしっかりと PR していけるような体制にしていいただければ、やったことが 1.5 倍位になるんじゃないかなと思いました。

あとは、山形を好きになるというところでは、モンテディオですとか、そういったいわゆる仕事と学校以外の日々の活動、住んでる人がシビックプライドじゃないですけども、地元をしっかりと誇りたいと思えるようなそういう活動も大事だなと思いますので、モンテの応援とか、色んな施策とか県としても何かできたらいいんじゃないかなと、いくつか施策の方もあるようなんですが、そう思ったところです。

日本国内、海外含めて、山形に来るという構図のところでは新幹線があったわけですが、仙台に行くのが福島から 30 分なのに、山形に来るのはなぜか福島から 1 時間 30 分というところは早く解決すればいいのになと個人的にもいわゆる集客っていう意味で思うところがあります。

また、山形空港で思うところがありまして、中にお洒落なショップとか、色々な販売しているアイテムとかも最近すごくお洒落になっていて、こんなにお洒落な物を山形の空港で売っているんだと思うんですけども、なかなかそれが知られてないんじゃないかなと思うのと、せっかく売っているのに入ってすぐの売店で、本当に 1 コーナーみたいな感じで売ってあって、もう少しお洒落な物、企画のいい商品を売っているというのをアピールできると、せっかく来た観光客の方とかも日常からちょっと離れた山形の良さっていうのを体感できるんじゃないかなと思いました。

加えて、交通の便というところでは、地元民とか私のように出張とかで山形空港を使う身分としては、駐車場は雪が積もるので車を置いていけない現実というのが実はありまして、冬だけなんですけども。今日朝行って夜帰ってくる位だったらいいんですが、2、3泊空港に置いておくとなると空港には怖くて車を置いておけない。帰ってきたら雪でつぶれてるんじゃないかみたいな心配があって、なかなか冬は空港を利用する気になれないといえますか、使いたいんですけど、どうしても新幹線とかになってしまうところがあります。

山形空港にもしかしたら、立体というか屋根がついている駐車場とかがあれば、旅行に来る方も、旅行に行くようなそれこそ台湾に行くような方とかも、一度山形空港に置いてそこから羽田から飛ぶとか、一回成田まで新幹線で上野を経由してとかではなくて、羽田から直接、山形から羽田に飛んで直接羽田から飛んでいく。様々できるようになって、利便性としては非常にいいのではないかなと思います。

【沼澤委員】

先ほど来、人材難というキーワードでお話がたくさんの委員の方からございました。当社サービス業、葬祭業においてもですね、その悩みの種は一緒でございます。

しかしながら、脱社会を迎える中で、亡くなる方というのは残念ながら多くおります。仕事はありがたいただくけれども、働く方がいなくて仕事が減らない現実。そこを離脱するために、当社では、高齢者や障がい者、外国人、あとは介護をしている方々、いわゆるダイバーシティ人材の方々の活用を推進しております。

言葉で言う綺麗なんですけれども、実は結構難しい面がありまして、私から一つお願いしたいのは、これらの方々の働きやすいような環境作りであつたりとか、意識の醸成、またその企業さんが受け入れやすいような何か待遇のようなものがあると、いろんな企業さん、このダイバーシティ人材が利活用できるのではないかと、そういうふうに思いながら話を伺っておりました。

ここから2点ほどちょっとお話をさせていただきたいと思います。1点目は若干場違いかも知れませんが、現在文化時代と言われており、先行きが不透明で将来の職場は大変困難な時代になります。為替変動や原材料高騰などの経済環境リスク、少子高齢化などの社会課題リスク、ロシア・ウクライナ侵攻などの生活リスクなどですね。そして、気候変動などの自然災害リスクと私達を取り巻く環境は様々です。

企業でもそのリスクに対応するために、BCP、いわゆる事業継続計画の方を策定しておりますし、この度、産業振興ビジョン、様々な計画策定においてもですね、リスクヘッジする事業というのはたくさんございます。

しかしながら、個人的な私の意見なんですけれども、人々の生活に欠かせない、衣食住のライフラインの将来性を見据えたビジョンというの、ここにあるといいのかなと思いました。

具体的には、食とエネルギーの確保です。2011年3月11日、東日本大震災を発生して間もなく12年が経過しようとしております。首都直下型や南海トラフ地震、また富士山噴火がいつ起きるかもわからない中で、この東日本大震災やロシアのウクライナ侵攻というのは、私達に様々な教訓を教えてくださいまして。

従って、有事の際、山形県民の暮らしを守る、食料とエネルギー、これらを守るBCPというものも必要かなと思います。

この度の産業振興ビジョンは、主に産業や経済分野における具体的な施策や展開方法を示してい

る計画と伺っておりますが、産業界だけでなくですね、食料問題もエネルギー問題も解決するビジョンを縦割りでなくて、横とのつながりを連携して、共有して産業振興ビジョンに明確に落とし込むとよろしいのかなと思います。

山形県のBCPを策定し、万が一に備えることで、誰もが安心して暮らせる災害に強い山形、さらには、持続可能な山形の実現につながるものと思っております。

2点目です。山形県の暮らしを支える山形県産業振興ビジョンも令和2年度から始まり、令和6年度までの期間もあと2年となりました。この度の産業振興ビジョンが素晴らしかっただけでは終わらせないためにも、しっかりと効果検証と効果測定、そして目標達成に向けた計画策定を見直す段階であると感じております。

そのような観点から資料を拝見していたのですが、資料2の2ページですね。こちらの体系がすごく非常にわかりやすいなと思って見ておりました。なぜかと申し上げますと、目標数値は掲げているのにその目標数値がまだちょっとまだ届いてない分野があると。その分野を目標達成するための新規また拡充、そして継続というですね、事業がこの資料2の2ページに書かれておりましたので、この辺も大変素晴らしいなと思います。

しかしながら、なぜ新規事業なのか、なぜ継続なのか、拡充なのか、その辺がですね、ちょっとこちらの資料からは若干、個人的にはわかりにくい部分があったので、もっともっと資料のシェアというか、そういったことが気になるころでした。

今一度ですね、これらの事業を見直していただいて、またこの次のビジョンに向けたものを貴重な機会へと結び付けていただけたらなと思います。

【芳賀委員】

私どもの業界のIT企業をベースに、私の私見・要望という形で今回ちょっとお話をさせていただきたいなと思います。

今、社会の課題と言ったら、日本全国、少子化問題。これは産業に関われば働き手不足につながっていくわけです。そういったところをどうやって補うのかということで、先ほどからDXをしなきゃいけない、DXで人手不足のところを補ってやっていくんだとなっておりますが、それを支える業界が我々の業界だという認識でおりますけども、我々も人材不足です。人手足りません。いくら求人を出しても、なかなか地元でIT技術者から来ていただくというのは難しい状況にあります。県を含めて、その辺のご支援をいただきたいなと思います。

山形県の産業振興の活性化イコール山形県のパワーだと私は思います。じゃあ、どのようにして産業振興を活性化させていくかというのが一番大きなテーマじゃないかなということで、広域に考えると、今、庄内浜では洋上風力発電が今起こっております。県もそれなりの担当の部分で色々なことをやっているかもしれませんが、産業労働部でも決して他の部門の仕事だとは思わないでいただきたいかなと思います。当然、洋上風力発電関連の企業誘致、それから新たな雇用創出。そして、洋上風力を作るのも港で作るわけです。

この間、IT業界の同じ代表の人から話を聞いたところ、今秋田はバブルだと。どうしたのって聞いたら、今秋田の空港チケット、宿泊、夜、そういったところはほとんど抑えられないほど、洋上風力発電に関わる人が中央から来て、すごい賑わいがあるということで、規模が半端ない。そして、ただ沖合に風力発電を立てるだけじゃなくて、自分のところの港でそれを組み立てるスペースを作らないといけませんので、港は半減です。

今、酒田の関係する企業の方からも色々話を聞きますと、後発の新潟県はものすごい勢いで国に色々な形で申請をしていると。このままだと、新潟と秋田にあれば、庄内はもういいんじゃないとなる。地形的にもですね。そのままで山形県はいいのかと。

先ほどから交通インフラの話も出てきましたが、庄内の陸海空ともに満足な状況ではないと思います。そこをオール山形県で。県も市も庄内全体です。そして、民間もそこに対して洋上風力発電、これが山形県の産業振興の起爆剤になってもらいたいかなと思っております。

これは私の主観ですので、そんなことは当然考えているよと既になっているかもしれませんが、地元の企業としてそこら辺宜しくお願ひしたいと思います。

それから、D X化という言葉がすごく出ておりますけども、そんなに難しく考えないでいただきたいかな。昔、インターネット買いますっていうお客さんがいたんですね。インターネットを買いに来ました。ふっと思うんですけども。今D Xを買いに来たみたいなの、今D X化をするために何を買いえばいいんだと。これは本末転倒ですね。

皆さんが仕事をしている中での課題、ここら辺の作業が本当に煩雑で間違いの多い仕事がある、ここで残業が発生するとか、これは何とかならないのかなと。ましてや人手が少なくなると、余計それで残業が増えていくことになります。そういったところを改善させていくのがD X化の一つです。

パソコンって、例えば民間であれば、人給・財務会計とかね、こういったシステムが稼働してると思います。売上請求するための販売管理、生産管理システム、これを使っていれば、これでコンピューターを一番使ってると思うけども、パソコン1台にしてみれば、スペックの2割も使っていないです。皆さん、帰る時パソコンの電源落としていませんか。もったいなくありませんか。

例えば、今日の会議です。私の提案ですが、いつかペーパーレス化できないでしょうか。この資料を作って、これをプリントアウトして配布する。そして差し替えがあった時、一つ一つまたそれを直す。ペーパーレス化をすることでかなり改善はできると思います。これも立派な業務のD X化の一つだと思います。

それと、D X化だけでなく、このペーパーレス化するだけで、SDG sの4つの目標に該当します。そういったことをやってみたらいかがかなと思いましたが、私見ですけれどもお話をさせていただきました。宜しくお願ひいたします。

【林委員】

スキー業界からの視点で、私のわかる範囲で色々お話をさせていただければなと思っております。

まず一番最初に、私は本当に山形県が大好きで、ここよりもっと田舎の鶴岡の羽黒に住んでいるんですけども、何が好きかというとやはり自然ですね。自然ってここにしかないわけではないんですが、本当に山形県が誇れる自然環境にある、そこに住んでるということが本当に誇らしいなと思っております。

私達の仕事というのは、スキー・スノーボードということで自然に直結してますので、そこから若い方達であったり、色んな方達と今だと中国に行ったり、山に行ったり、色んな所に行って国外の方ともお話しする機会があるんですけども、外からどう見えているか、自分達からどう見えているか、そういうところがちょっとブレとかズレがあるなっていうところがすごくあります。

先程、黒田委員がお話なさったように、山形県を好きになってもらうっていうことが、ここに住んでいる方達、ここで学んでいる方達にも本当にそうあって欲しいなと思います。

先程からも本当に今人手が集まらないというお話がすごくあったんですけど、うちは真逆で、本当に勤めさせて欲しいと、大卒の方、高卒の方、たくさんの方が今まで是非この会社で勤めさせて欲しいんだと。県内外からです。ハローワークさんとか通さないで是非働かせてくださいと言って来てくださるんですね。

うちの事情としては、企業秘密というものがたくさんありまして、簡単にじゃあどうぞという訳にはいけないので、そういった意味では人材不足ではあるんですけど。皆さんに、なぜうちで働きたいんですかと聞いた時に、いやなんか楽しそうだからって言う。そんなに給料払えませんかと言うと、いやお金じゃないです、冬はスキーをして、自然の中で豊かな暮らしをしたい、ここでワクワクする仕事がしたいんですと、そう言っていたいているということがまずあります。

今スキー・スノーボードをしている若者達に話を聞くと、黒田委員が言われたように、待遇というのは一番大事だと考えておられる方も多いと思いますが、今若者達は豊かさというところが、お金じゃないって時間が経って思っている若者も大変増えてきていて、お金だって思っている方達はやはりそういった企業や都会に出て行くでしょうし、豊かさを求めている若者達も本当にたくさんいるということで、本当に山形県はそういった点ですごくアピールできるなと思っています。

なぜかと言うと、スキー・スノーボードの仕事をしていて思うことは、みんな結局雪が降らなくても遊ぶことを止めないんですね。必ずどこかで遊ぶんですよ。スポーツをして汗を流したりして遊びたいんです。雪が降らない年は海に行きます。雪が終われば、自転車に乗ったり、何かしらで遊ぶ。その遊び場として山形県というのは本当に魅力の大きい遊び場であるなって、そういうふうにとっても感じています。

ここからは要望なんですけれども、今県内の人達が豊かに暮らしていくというところで、スキー授業がどんどん減っていったるんですね、県内で。いつだったか、県の方に問い合わせ、どの位県内でスキー授業が行われているか、そのデータ化したものはありませんかという問い合わせしたことがあって、そしたらそういったものはお出し出来ないし、ありませんって言われてしまっ

て。結局何が言いたいかというと、今スキー・スノーボードのため、一生懸命子供を山へ連れて行っている親御さん達って、皆さん幼少期にスキー授業をされて、スキーの楽しさを知って、親におねだりしてスキーに行きたい、スノーボードに行きたい、山に行きたいと言って、親御さん達も子供を喜ばせてやりたいと思って山に連れていく。本当に楽しかったから子供にもさせたい、自分が親になったときっていう、その世代が親になって子供をスキー場に連れて行ってるんですね。

どんどん少子化が進んでいって、スキー人口も減っていって、蔵王もそうですし、県内のスキー場、皆さん大変な状況なんです。何とか、最初の一步を私達民間ではなくて、行政の皆さんにお願いしたいと思います。是非その最初の一步、ハードルが高くて、やはり道具を揃えたり色んなことがあるかと思うんですけども、せっかくこういった自然豊かな所に暮らしていて、自然に親しみながら生きる生き方ができる場所なので、是非そういったところをデータ化していただいて、どのような現状であるかというところを是非調べていただいて、今後に活かしていただければなと思っています。

もう1点、インバウンドに関してなんですけれども、私海外に行く機会がありまして、今なかなかコロナで海外に販売するって難しいんですけども、輸入するにしても販売するにしても、実際に自分が行って、どこの会社も通さないで自分でやるんですね。

そこで何が見えてくるかというと、人と人との関わりの中で何を日本に求めているんだろう、この富裕層達は何を日本で体験したいんだろうって、すごく聞き耳を立ててしまいます。その時にや

はり皆さん教育って言うんですね。日本の若者は本当に礼儀正しいと。実際に中国、台湾へ行く
と子供達の教育がなってないんです。全てとは言いません。私が見る限りでも、だから日本人は礼
儀正しいんだと言われるのがわかります。そこを学ばせたいって言うんですね。自分の子供と同
年代の子達がどんなに礼儀正しく生きてるか、日本で。その若者達を自分の子供達に見せたい、体
験させたいと言うんですよ。

体験学習も色々あると思うんですけども、外国の子供達にその日本の良さ、しつけだったりも
するわけで、そういったところを是非体験させていく場所に山形県がなればいいなと、ちょっと漠
然としていて申し訳ないんですが、そのようなことを考えておりました。

【山本委員】

我々が携わっている縫製工場、その中でも婦人服製造はなかなか機械化出来ないんです。最終的
には「人の手」がほとんどです。そのため、当社企業内の訓練校があり、30 年位前からひとりひと
り技術力を磨いて欲しいと創業者である父親の時から運営をしています。県内外に向けて、その学校
の良さ、そしてものづくりの楽しさを呼び掛けて来しました。

やはり弊社に魅力を感じて米沢に移住してもらう為には、どのような事が子供達は気になってい
るのかを聞いたところ、雪が多いから嫌だと答えた人はいなく、遊ぶところがない、伸び伸びと出
来る場所がないと言う声が圧倒的でした。そのところは施策にもありますが、是非考えて行って欲
しいと思います。

個人的には百貨店も必要かと思います。我々の作った製品が見れないと言う事もありますし、山
形は繊維も盛んな県でもあるので、もっともっと「衣・食・住」の「衣」の部分にも力を入れて行っ
て欲しいです。今、メイドインジャパン製の衣料品は全体の何パーセント位かご存知でしょうか。
3 パーセントにも満たないんです。そのところを我々で維持していることを誇りに、社員と頑張っ
てものづくりをしています。

大好きな山形、本当に素晴らしい企業が多いですが、どうしても「点」だけで「線」にはなってい
ないようですので、なんとか「線」になって行くように、今後も協力をして行きたいです。「ひとつ
の服が着る人をワクワクさせるだけでなく、地域も変えて行く」そう思っています。

【長谷川会長】

各委員の皆様からのご発言が以上でよければ、最後に私から一言だけ発言させていただきます。

現在、ポストコロナの時代を迎えているということでもありますけども、我々が想像している以上
に経済社会の流れが速く、以前の産業に戻ればいいという発想が立たない状態になっています。

脱炭素社会、デジタル化対応しかり。先生からお話ありました人手不足は致命的な問題になりつ
つあります。県内全般において大変大きな問題かなということです。

従って、県庁の皆さんと意見を交換しながらですね、また経済社会の変化に対応しながら、人材
育成をやっていくという方法しかないんだと思っております。

それでは、以上で審議を終了させていただきます。活発にご発言いただき、誠にありがとうございました。

4 その他

5 閉 会